

河川防災ステーションの役割と水の郷さわら

利根川下流河川事務所長 内堀 寿美男

1. はじめに

「水の郷さわら」は、千葉県北東部に位置する香取市の利根川沿いにあり、佐原地域の都市再生に寄与する新たな水辺の広域交流拠点の形成のため、佐原広域交流拠点整備事業として、国、千葉県、香取市の三者が連携して行う各種関連事業（河川防災ステーション、国道356号拡幅、河川利用情報発信施設、水辺交流センター、地域交流施設、佐原河岸・緊急船着場等）により構成された複合的な整備事業です。



図－1 香取市の位置

※本事業は国の河川事業で初めてPFI手法により整備したもので、2008年7月から約15年を事業期間とし、各種施設等の建設、維持管理、運営等を民間の資金、経営能力及び技術的能力を活用することにより、効率的かつ効果的に公共サービスを提供するものです。

2. 水の郷さわらの整備方針

「国・県・市及び民間は各種関連事業の一体的整備を図るとともに、市民による地域づくりの活動と連携した運営を行い、地域住民と広域から訪れる人、そして利根川と「江戸優り（まさり）佐原文化」の多様な交流を促進し、利根川下流部の防災拠点を形成するとともに、佐原地域の都市再生に寄与する広域交流拠点を形成する」ことを基本方針とした4つの拠点機能を有しています。

①防災拠点の形成

河川防災ステーションや緊急船着場、水辺交流センター（水防センター）等の防災関連施設を一体的に整備し、利根川下流部の防災拠点を形成します。

②水辺利用拠点の形成

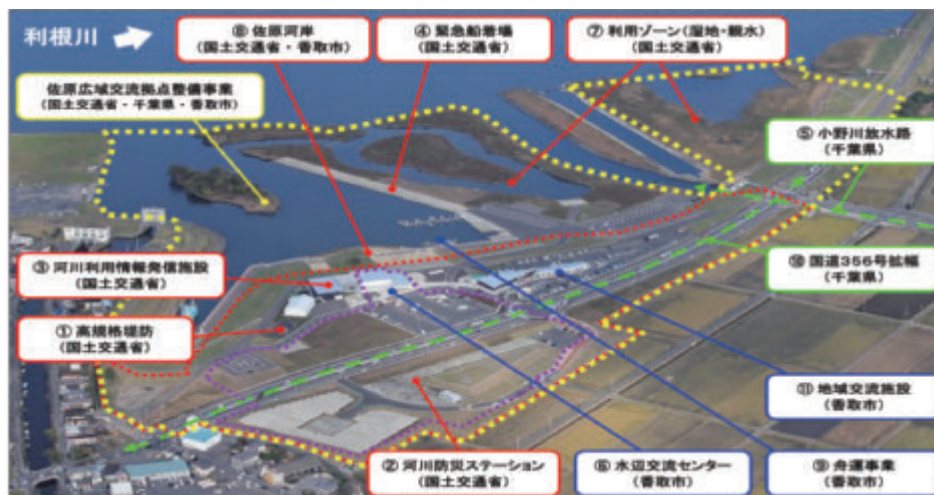
利根川下流部の豊かな自然環境と水郷筑波国立公園に指定された雄大な利根川の景観を活かし、自然観察や水面利用を促進し、水辺の利用拠点を形成します。

③文化交流拠点の形成

水郷・佐原の歴史と風土をつくってきた利根川と、商都・佐原が培ってきた「江戸優り佐原文化」に代表される地域との関係の再構築を基本に、利根川と地域がつくりあげてきた歴史・風土・文化を継承し、広域的な交流による水郷・佐原の新たな「文化交流拠点」を形成します。

④交通拠点の形成

東関東自動車道佐原香取ICに近く、国道356号により香取市中心市街地に接し、また舟運発着所が整備されている優れた交通条件を活かした、「交通拠点」を形成します。



図－2 水の郷さわら整備図

3. 防災拠点としての水の郷さわら

災害時における復旧等拠点機能の確保を前提とした災害対策施設であることはもちろん、平常時においては防災・減災意識の向上及び河川利用推進、自然再生に資する施設として有効活用を図り、地域の活性化・地域振興に寄与できるものとしています。



写真-1 防災拠点整備

①河川防災ステーション

「佐原河川防災ステーション」は、災害が発生した場合の復旧活動を迅速に行う上で必要な土砂などの緊急用資材を備蓄しておくほか、資材の搬出入やヘリコプターの離着陸などに必要な作業面積を確保するとともに、洪水時には市町村が行う水防活動を支援する基地となり、平常時には地域の人々のレクリエーションの場として周辺施設と一体となった有効活用を図っています。



図-3 佐原河川防災ステーション

②河川利用情報発信施設

河川利用情報発信施設は、災害時には迅速な緊急復旧を図る基地となる防災センターとして役割を発揮しますが、防災教育常設展示室を設けることにより、利根川下流域における河川改修の歴史等を展示することで、地域の方々及び利用者に河川事業に対する理解の促進を図るとともに、環境・防災学習を行う啓発活動拠点の一つとなっています。(写真-2)



写真-2 防災教育常設展示室利用状況

③車両倉庫

排水ポンプ車や照明車など、災害時の緊急車両等を格納するための車両倉庫及び資材倉庫などの役割を持っています。



写真-3 車両配備状況

④水辺交流センター

水辺交流センターは、災害時には香取市の水防センターとして役割を発揮するとともに、広域交流拠点施設全体の管理機能を有し、交通の結節点としての利便施設を提供し、水辺利用促進や観光等を含めた交流人口拡大のため、佐原河岸を中心とした水辺レクリエーション、環境学習等を行い水辺にふれ合うことを目的としています。



写真-4 環境学習（水質調査）



写真-5 E ボート体験

4. 水の郷さわらの利活用（平常時）

水の郷さわらの周辺環境である利根川下流部の中下流域は「水郷筑波国定公園」や「千葉県立大利根自然公園」に指定されたのどかな田園景観を有しており、香取市中心部の小野川周辺は「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されるなど、歴史的建造物が保存・活用されています。



写真-6 重要伝統的建造物群保存地区内の建築物



図-4 小野川と重要伝統的建造物群保存地区

このため、水の郷さわらは小野川の舟運事業（写真-7）と連携し、佐原地域の観光客に対し香取神宮参拝客を含め回遊性を強化することで通年的な利用を促進させることを目的としています。



写真-7 小野川の舟運事業

地域交流施設（地域振興施設・交通安全施設）として整備された道の駅は利便性、機能性、安全性を重視して整備し、モータリゼーションに対応した地域の玄関口、地域情報の提供や食味体験（飲食施設）、地場特産品などの展示販売などを通じて都市と農村が交流できる拠点とするとともに、交通安全施設として道路利用者の憩いの場として活用されています。

これらの施設は、各施設の個別目的に基づき整備されたものであるが、各施設及び周辺環境が連携することで、単独の施設では得られない相乗効果や、全体で「広域交流拠点」としての効果や魅力を発揮する施設としています。（図-5）

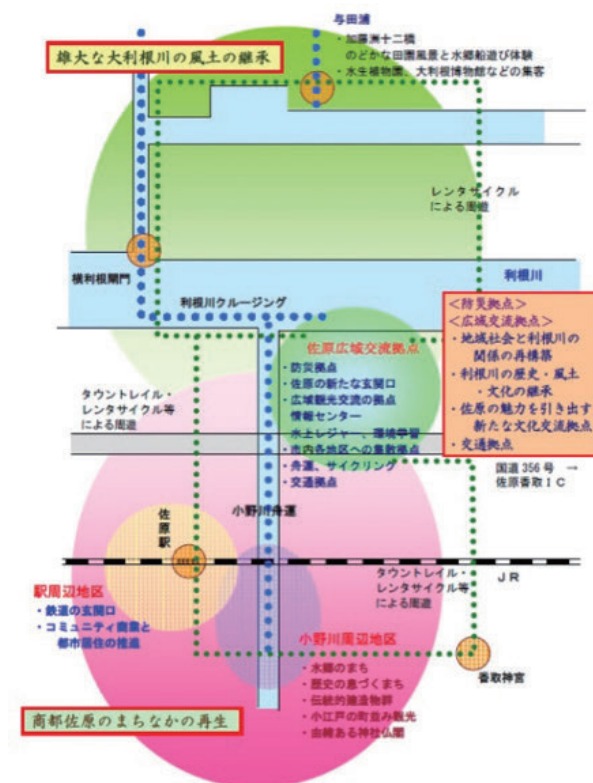


図-5 各地区の機能と佐原広域交流拠点のあり方

また佐原広域交流拠点の年間利用者数は82万人を想定（うち地域交流施設利用者72万人）していましたが、例年100万人を超える利用者があり香取市の観光者数及び小野川沿いの観光は連動しているようです。

近年は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からイベントなどは開催が見送られたこともあり、水の郷さわらの来場者は多少の減少はあったものの例年と変わらない状況でありました。



図-6 香取市観光入込客数

しかし、例年開催されていた「まつり in 水の郷さわら」(写真-8)などの催し物が開催されることが地域の活性・振興に繋がることも明らかです。



写真-8 まつり in 水の郷さわら

また、平成23年3月東日本大震災による影響は大きく、特に小野川沿いの観光者数は香取市全体の観光者数の減りに対して大きく減少しているのが「図-6 香取市観光入込客数」から見て取れます。この原因は小野川の液状化により舟運事業の運休及び伝統的建造物の被害と考えられます。(写真-9)



写真-9 東日本大震災による被災

これら震災復旧作業が完了した約2年後の平成25年2月には舟運事業が再開され観光者も徐々に回復し小野川沿いの観光者数は少しずつではあるが増加傾向であり合わせて水の郷さわらも微増と見て取れることから水の郷さわらの運営は小野川沿いの観光が重要と考えられます。

5. 水の郷さわらの利活用(災害時)

平成23年3月11日に東日本大震災が発生し、香取市では震度5強を観測して家屋及び公共施設が液状化等により大きく被災しました。「水の郷さわら」においても電気、水道などのインフラが止まったため「道の駅」、「川の駅」の営業が停止するとともに、親水護岸等も大きく破損・沈下して市の管理する係留施設は使用できなくなり舟運施設は営業不能に陥りました。また、香取市内で停電や断水が生じたことから近隣住民が避難され、施設自体は香取市の避難施設には指定されていませんでしたが、「川の駅」施設内に一時的に受け入れ食事等の支援を行っていました。

また、施設は一時、停電・断水が発生しましたが自家発電を確保するなどしてTEC-FORCEの作業基地となり、迅速な復旧作業が円滑に進められました。

私自身も発災後、ここを拠点に利根川下流部の被災調査等を行ったことが、良い経験となっています。(写真-10)(写真-11)

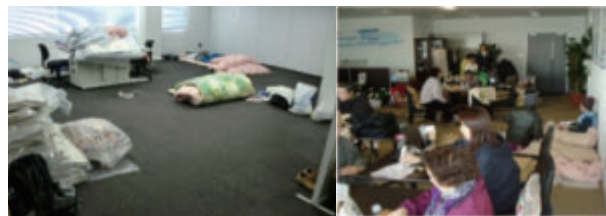


写真-10 避難者の状況



写真-11 TEC-FORCE 拠点

さらに、河川防災ステーションのヘリポートはドクターヘリの離発着場として使用され、復旧資材の搬出など河川防災ステーションとしての役割を十分に発揮しました。

6. おわりに

河川防災ステーションと一体となった水の郷さわらではありますが、平常時の利用は道の駅など利用客がほとんどであり道の駅としての印象が強く、一方防災ステーションとして平常時の利活用が少ないのが現状であり認知度は低い状況です。

しかし認知度は低くとも東日本大震災時には地域住民の方の一助となり、利根川下流河川事務所としての災害復旧等の基地としての役割は十分に果たせたものと考えています。

今後は幅広く河川防災ステーションを知っていただくためにも災害対策機器操作講習会、水防学校の開催及び防災教育常設展示室の利用を促進できるよう考えています。(写真-12)



写真-12 災害対策機器操作講習会・水防学校

引用文献

- 1) 佐原広域交流拠点整備事業基本方針